

体操競技の種目特性について

——平行棒運動を中心に——

具志堅 幸 司*

(平成 7 年 9 月 21 日受付, 平成 8 年 2 月 19 日受理)

Eine Studie über die Charakteristik einzelner Geräte im Kunstturnen

——Im Mittelpunkt der Betrachtung steht das Gerät Barren——

Koji GUSHIKEN

Zu diesem Thema hat der Autor zuerst folgende drei Standpunkte Klargemacht; Die Grundidee des heutigen Kunstturnens durch das deutsche Turnen von F. L. Jahn, die Haltung des Menschens in der modernen Gesellschaft, die gezeigten Übungsinhalte der drei besten Turner am Gerät Barren bei den Weltmeisterschaften und Olympischen Spielen im Zeitraum 1964-1994 (Die meisten Übungen wurden von Videofilmen genommen. Einige Wettkämpfe, die nicht durch Filme dokumentiert waren, wurden durch zusammenhängende Materialien analysiert).

Die Betrachtung wurde mit folgenden vier Standpunkten geführt; Diskussion, ob die Ausführung der Riesenfelge am Barren richtig ist oder nicht. Über das Problem der Körperhaltung. Diskussion, ob die Ausführung der seithängenden-ober stützenden Übungen richtig ist oder nicht. Über die Halteteile.

Als Schlussfolgerung der Betrachtung kann man folgendes sagen;

1. Die Riesenfelge soll nach der Charakteristik des Gerätes nicht am Barren weiter gefördert werden, sondern sie soll dem Reck überlassen werden.
2. Der Schwungteil mit gegrätschter Körperhaltung ist am Barren nicht geeignet.
3. Nach der Geräte-Charakteristik sind die seithängenden oder stützenden Übungen am Barren nicht geeignet.
4. Von den sechs Geräten der Männer aus gesehen soll der Halteteil am Barren als spezielle Anforderung bestimmt werden.

Als Ergebnis dieser Studie kann gesagt werden, daß es außerordentlich wichtig ist, wenn man irgendeine Vorschrift oder Regel ändern möchte, daß berücksichtigt werden muß, das Kunstturnen der Männer immer sechs Geräten hat und diese sechs Geräten immer in gegenseitiger Abhängigkeit zueinander bestehen.

1. はじめに

体操競技は審判員の役割上, 採点競技に分類される¹⁾。体操競技の採点は, 予め作られた採点規則集によって行われている。その採点規則集は 1949 年に初めて国際体操連盟 (FIG) によって, 冊子としてまとめられた²⁾。爾来, ほぼ定期的に改訂され現在に至っている。この間, 一貫して強調されてきた点, つまり体操競技で競い合っている中心的要素は『難しさ』『正確さ』『美しさ』『雄大さ』であった³⁾。しかし, 改訂を余儀なくされてきた背景

を考えると, これら以外の諸要素が影響を与えてきたということが理解できる。採点規則集は, 実施された演技を正しく評価し, 採点するための基準であることが直接的課題であると言える。その意味は体操競技の真の発展, 進歩に繋がっていかねばならないということである。

採点規則集の歴史を概観すると試行錯誤的なルールのあったことが確認できる。例えば, 1968 年版採点規則集には高難度技を奨励するために『減点緩和』^{注1)} なる

* 短大・体操競技研究室

ルールが存在していた。また、1980年代では、鉄棒における片手車輪が流行し、それを奨励するかのようルールが存在していた。しかし、これらのルールは体操競技の本来性に適合しないという理由から改訂された。

体操競技の研究活動の現状を眺めると、体操競技の種目特性に関する研究は少なく、直接選手指導に関わる技術分析などの研究が多くみられる。このような中で、滝沢は『体操競技界における現状の諸問題についての哲学的検討—進歩・発展の意味を中心に—』と題する論文を発表している⁴⁾。その中で強調している点は、改訂作業に当たった判断基準が社会の動きに惑わされ過ぎて、体操競技の本来性から掛け離れたところでの議論によって作られているということである。

体操競技は今、男子6種目、女子4種目から成っている。このことは大切な事柄であるが、現状をみると軽視されているように思われる。体操競技の源流を探っていくと、とりあえずはドイツ体操(Turnen)に落ち着くことになる。ドイツ体操の父(Turn-vater), F.L. ヤーン(Friedrich Ludwig Jahn=1778-1852)の考えていた体操の内容は、実に多岐にわたっていた。Turnenの時代的排他性は免れないが、それは今日の『体育』や『スポーツ』などと同じような意味で使われていた概念である。つまり、より豊富な身体運動を通しての陶冶を意味しているのである。1860年から続いているドイツ体操祭(Deutsches Turnfest)をみると、依然ヤーン9種目競技(Jahn Neunkampf)^{注2)}が実施され、広くドイツ国民に親しまれている。こうしてみると、現状における体操競技の種目制限は、ヤーンの理念に反することに繋がる。男子6種目(ゆか、あん馬、つり輪、跳馬、平行棒、鉄棒)は長い歴史の中で、ヤーンの理念に沿って形づくられたものであると言える。例えば、種目のオリンピック・ローテーション^{注3)}はその意味において顕著である。その点からみて、1992年に実施された世界体操競技種目別選手権大会は、その実施の狙い(体操競技の普及)は理解できるが、一考を要するイベントであると言ってよい。つまり、種目別選手権大会は、その実施方法によっては、種目のスペシャリスト化に通ずるもので、Turnenの理念から遠ざかるものである。

採点規則集の歴史を振り返ってみると、例えば1952年版のスポーツ・ルールズ⁵⁾の体操競技規則(男子)には次のようなことが記述されている。『最高点を与えるべき完全な演技とは姿勢、実施共に全く欠点なく、審美的演技の性質によく適応した調子及び態度を以て、きれいに、楽々と確実に実施されたものである』(第3条A項)そして、他の項でも『完全な容易さと完全な技術とに対

し、特別の注意を払う必要がある。競技者が辛うじて実施、又は不完全に実施し得るに過ぎない過度に困難な演技は厳重に採点すべきである』(第4条D項)としている。その精神は現在にも受け継がれている。ちなみに、1993年版の採点規則集⁶⁾第16条では『選手の能力に相応し、演技の難しさは姿勢的、技術的に正しい実施を犠牲にして無理に高められてはならない。選手は身体を完全に支配しなければならない。安定性、優雅さ、そして雄大性は試合における美的演技実施のための大前提であり、体操競技にとって最も重要なことがらでもある』と表現されている。この約40年間の歴史の中で表現こそ異なっているものの、意図する精神は普遍である。つまりそれは、危険を回避するという、生き物の本来性をルール化したものであり、体操競技をより体操競技らしくしようとするルールでもある。しかし、残念ながら体操競技の現場(競技会や練習の場面)におけるこのルールの適応は、必ずしも満足いくものではない。換言すれば、あまりにも難度指向に片寄り過ぎているということである。

この難度指向は、個々の種目をもつ種目特性を逸脱するようなところまでの悪影響を及ぼしている。例えば、平行棒における横向きでの懸垂運動は、鉄棒でのそれより難しいという理由から同じ運動であっても、高く評価されており、あたかもルールによってそれらの実施が奨励されているかにみえる。本来、懸垂での回転運動は鉄棒に委ねられるべきであり、その方向で体操競技の一種目としての鉄棒が発展してきていると考えるべきであろう。

特殊は個別と普遍に対応する概念で個・種・類の関係で表すことができる⁷⁾。体操競技で例えれば、車輪は個であり、鉄棒は種になり、したがって体操競技は類に値する。つまり車輪は個別、鉄棒は特殊、そして体操競技は普遍である。この関係の意味は、これら三つの概念が切っても切れない関わりをもっているということである。具体的には、車輪は鉄棒と深い関わりがあり、それをもって真の体操競技に通ずるということになる。

体操競技を愛する人は誰でも体操競技の発展を祈っているに違いない。しかし、体操競技の発展とは如何なることであるか、という疑問に答えることは多くの人にとって至難なことであろう。既に述べたように試行錯誤的なルールはこのことを意味していると言える。

進歩とは『物事がしだいによい方、また望ましい方に進み行くこと』であり、発展とは『のびのび広がること』『さかえゆくこと』である⁸⁾。つまり体操競技の進歩、発展とは望ましい方向に伸び広がっていくことである。

問題はこの望ましい方向がどのような方向であるかということになるが、それは少なくとも、体操競技大会で発表される演技内容がそれぞれの種目の特性に適合していなければならないということである。そして、その演技内容は終局的には陶冶を意味していなければならない。

本論においては特に平行棒の演技内容の分析を通してこれらの問題を検討しようとするものである。

2. 研究の目的と方法

体操競技における平行棒はヤーンが自ら創った種目である。その由来は、工事現場の足場の棒であったと言われている⁹⁾。当然、当時使われていた平行棒は現在と異なっており、ヤーンが始めて指導した時の平行棒の高さは120 cmの低平行棒であった^{注4)}。その後、時代と共に高さや、バーの形、更には器具の素材が変わり、弾力に富んだバーへと変容していった。現在体操競技大会で使用されている平行棒の高さは175 cmである。そして、バーの形は縦径7, 6 cm, 横径6~7 cmのやや卵形を経て、現在のような縦径5 cm 横径4 cmと細くなり、振動技の発展に影響を与えてきた¹⁰⁾。具体的には、逆上がり倒立や、(棒下倒立)などが屈腕から伸腕へのさばきへと繋がっていった。これら棒下での振動技は、1970年代後半に入ると、車輪技が出現するまでに至った。1978年に初めて平行棒において後方車輪倒立が発表された。爾来この技は、常に上位選手の必須技として演技構成に組み入れられてきた。殆どの選手は懸垂時に膝を曲げて実施しているが、最近では伸膝での捌きも見られるようになった。しかし、ルール上この後方車輪倒立は依然として懸垂における屈膝姿勢が認められており、難度において伸膝での捌きが優位に格付けされているにすぎない(1993年版採点規則集において屈膝はC難度、伸膝はD難度に格付けされている)。確かに、この技の発表は当時全く新しい概念を呼び起こしたということから高く評価されてきたが、体操競技における平行棒の種目特性から考えると一考を要する重要な事柄である。具体的な問題の一つとしてここに屈膝の必然性を挙げることができる。それは、演技者と平行棒の高さの問題である。つまり、平行棒は本来伸身での懸垂を要求する種目ではなかったということである。それは、ヤーンの意図した支持(腕支持も含む)を中心とする運動と深い関わりがあるということからである。このような潜在的な問題を抱えながらもこの車輪運動は、その後様々な発展技を創造していった。例えば、筆者自身『グシケン』(懸垂前振りひねり支持)という技を発表しながら、自らこの問題を考えなければならないということは、何とも皮肉なこと

ではある。この『車輪』については次項の考察に譲ることとする。

これまでの採点規則集の改訂はFIGの技術委員の手によって行われてきた^{注5)}。自らその任に当たっていた滝沢は『諸ルールがマス・メディアに強く影響を受けてしまうということは、目先の得に考えが集中してしまうからである』¹¹⁾と警告しているように、現状の体操競技を眺めると、その原点を考慮せずルールづくりがなされていると言っても過言ではない。

船井は、21世紀は『細分化』の時代から『統合化』、『一本化』の必要性を強調している¹²⁾。その意味は、単に細分化を否定しているのではなく、上述したように物事の本質を軽視した部分的発展に警告を発しているということである。換言すれば、『細分化』は目先の事柄への執着を意味し『統合化』『一本化』は本来性を意味していることになる。

本研究では、こうした潜在している諸問題を掘り起こし、それらの根源を探ることにより、今後の体操競技の真の発展に寄与していこうというものである。また、本研究は体操競技の種目特性に関する研究であり、その方法は主に第18回近代オリンピック・東京大会(1964)から第29回ブリスベン世界体操競技選手権大会(1994)に至るまで、約30年間の平行棒における上位選手の演技内容の傾向について分析し、それらの結果を体操競技の種目特性と、現代社会に生きる人間像との関わりにおいて考察するというものである。

分析の対象になった演技内容はオリンピック競技大会と世界選手権大会で発表されたものであるが、一部資料収集できなかった大会がある。また、研究対象となった大会の中でも一部収集できなかった演技内容もある。それらの演技内容については、前後の大会及び演技内容から判断し、考察の一助とした。

3. ドイツ体操(Turnen)の理念について

既に一項で触れたように、現在の体操競技の源流はヤーンのドイツ体操に求められる¹³⁾。ヤーンが1811年、ベルリンの郊外ハーゼンハイデにおいて体操場を開設したということは、広く知られていることである。岸野¹⁴⁾によると、ヤーンは極めて愛国心旺盛で『ドイツのことはドイツの言葉で示したいと考え、この活動をTurnenと名づけた』と言われる。一方、成田¹⁵⁾によると、その目的を『祖国についての知識と愛を育て、人間の生のふれ合いを通して、集団生活の中で人間愛や共同体意識を高める』ことに置いたという。更に『国民全体の協力体制をつくらなければならない状況の中から、共同体づくり

に役立つ Turnen の活動がはじまったのである』と言われている。こうしたヤーンの思想をみると、現代に生きる我々にとっても重要な意味を持ち、現代人に対する教育の在り方でもあると言ってよい。それはまた、ヤーンが近代体育の先駆者と言われる所以でもある。歴史的には、ヤーンの弟子たちによる過激な政治活動が原因して体操禁止令 (Turnsperre) に見舞われたが、その回復後はヤーンの理念は世界中に広まっていった。特にドイツ語圏を中心にその思想は確実に根付いたと言っても過言ではない。それは 4F で表されているシンボルマークで明らかにされよう。つまり、Friche (元気), Frei (自由), Fröhlich (よこび), Fromm (思いやり) がそれである。そして、これらは Turnen を通して形成されるものとヤーンは考えたのであった。それは、特に『人間は単独で人生を送れるものではなく、諸々の結びつきが必要であることを強調し、人間生活の社会性ということ述べているのである』⁹⁾と言われるように、人間としての理念を網羅したモットーであると理解できる。

ヤーンはこのように自らの理想を実現するため、その具体的教材として歩、走、跳、投、など人間としての基本的運動から運搬、登、登山、水泳、スケート、そり、射、ボート、ヨット、剣術、乗馬、跳馬、魚突きなどの生活に直結するような多岐にわたる運動を奨励している¹⁷⁾。

体操競技は、1896 年の第 1 回近代オリンピック・アテネ大会の正式種目となっている¹⁸⁾。現在の男子体操競技の種目は、6 種目からなっているが、当初は現在の『ゆか』がなかった代わりに 100 m 走や、棒高跳び、走り高跳びのような陸上競技種目も入っていた。その他にも綱登り、こん棒、回転運動のような特殊な種目も実施されていた¹⁹⁾。現在の男子体操競技がオリンピック競技大会で 6 種目になったのは、1932 年開催の第 10 回近代オリンピック・ロサンゼルス大会からであり、その時から『ゆか』が登場することになった。つまり、この当時から体操競技と陸上競技やその他の競技種目が明確に分離され、よりそれらの競技性が明らかになっていった。ちなみに、既に述べたように、体操競技はヤーンの理念を配慮しつつ、それを 6 種目にまとめたものである。

ヤーンの Turnen の特質は『人権の解放思想に基づく平等の精神、生活に統合した公開性、社会的精神、自主独立の精神というものであった』²⁰⁾。と言われるように、まさに現代社会が求める理念に符合するものである。また、このようなヤーンの活動は、もう一人の近代体育の先駆者と言われるグーツムーツが実現できなかった時代

的要求に独自の解決策によって応えようとしたものである。具体的には、ヤーンは体操場における敬語の使用を禁じたと伝えられている²¹⁾。そして、そのことは現状におけるドイツ語圏で受け継がれている。

4. 平行棒の歴史的発展について

4-1. 平行棒 (Barren) の発展

ヤーンは 1811 年ベルリン郊外のハーゼンハイデの自らつくった体操場に、はじめから平行棒を設けた。設置当初はあん馬の補助的用具ないし、予備練習器械として考案され、平行棒運動は『腕力の強化の運動』『勢いをつけておこなう運動』に分けた²¹⁾。腕力の強化の運動とは主に筋力トレーニング的な運動で、勢いをつけておこなう運動は、現在のものとは違って馬術的な運動であった²²⁾。ちなみに、日本では明治 39 年に『横木』と称して競技会が開催され、昭和 5 年には名称も『横木』から『平行棒』となった²³⁾。

19 世紀の半ば過ぎ、平行棒運動を成長途上にある青少年たちに実施させることが是か非か、という理論闘争が繰り広げられた²⁴⁾。別名『平行棒論争』(Barrenstreit)と呼ばれるものであったが、最終的には平行棒運動は『よし』という形で結論が出された。この論争後、器器具の改良なども相俟って振動技が飛躍的に発達したと言われている。

金子は『発生当時の運動形態がこんなに衣がえしているものも珍しいといえる』²⁵⁾と述べ、発生当時と現在の平行棒における運動内容に大きな差のあることを認めている。それは現行の採点規則集に示されている、演技構成上必要な特別要求からも明らかである²⁶⁾。また、1975 年版採点規則集では平行棒において、『両手を放して行う技や静止技をもって構成しなければならない』²⁷⁾とされていたが、1989 年版採点規則集以降は『静止技』の規則はなくなった。このことは、平行棒運動も運動形態が異なるものの鉄棒と同様、振動技系の技を重視してきたものと考えることができる。

ちなみに、女子の段違い平行棒も原型をたどると、男子平行棒がその元になっている。『ミュンヘンのマイザー嬢 (Meiser, B) は平行棒で倒立や前方宙返りなど軽々とやっつてのけ男子競技にも参加しうる技能を誇った』²⁸⁾。前述の平行棒の発生からも明らかのように、平行棒の運動を女子が行うことは医学的にも問題が生じた。つまり、段違い平行棒の発生は、女子の母体特性への配慮から生まれたものである²⁹⁾。その後、1936 年に開催された第 11 回近代オリンピック・ベルリン大会で段違い平行棒が規定演技として初めて実施された³⁰⁾。この

大会では、段違い平行棒の高棒と低棒の幅は 80 cm であった。現在行われている器具での幅は 160 cm あり、バーの規格の改良と共に、2 本のバーがあるにもかかわらず、男子鉄棒運動と同じような運動形態で実施されている。

既に述べたように、1811 年平行棒運動が行われたのであるが、ヤーンがはじめて、指導したときは次のような運動内容であった^{注7)}。

平行棒の中央に縦向きで直立——両足でジャンプして支持になりただちに前振り——支持後ろ振り——開脚でバーの上に脚をのせる——右足をバーにのせ——左足をバーにのせ伏臥支持になる：3 回腕の曲げ伸ばし——両足をバーからはずし支持前振りひねり下りあるいは、支持前振り——後ろ振りから下向き転下り

1811 年 平行棒の高さ 120 cm

ヤーンの平行棒を創造したきっかけが、工事現場の足場であったことから、バーに足をのせる運動が許されることは容易に理解できるが、現状における平行棒運動と比較して大きな差のあることは明白である。

4-2. 第 18 回近代オリンピック・東京大会 (1964) 以降の平行棒上位選手の演技内容について

第 18 回近代オリンピック・東京大会以降のオリンピック大会 (OS) および世界選手権大会 (WM) の演技内容を研究の対象にしたことの主な理由は、特にその頃から TV を中心とするマス・メディアが体操競技の発展に影響を及ぼしはじめたからである。以下に挙げる資料は主に、8 mm フィルムおよびビデオテープに納められた演技内容の映像から抜粋し、体操用語で表したものである。一部映像のない大会については、関連資料を参照にしてまとめたものもあるが、全てではない。表 1 から表 10 は技群によって分類されており、それぞれどの大会でどのような技が発表されたかを表したものである。表中の数字はその大会における平行棒の順位 (成績) を示している。なお、() 内の数字は同順位を示している。また、同一技の中にある同じ数字は一演技内の複数の実施を意味している。

5. 現代社会に生きる人間像

阿部³¹⁾は『実存主義的人間像』に対し、『科学主義的人間像』という両極端の概念を用いて、現代社会に生きる人間像が後者に値すると述べている。筆者も現代社会を眺めるとそのことに同感できる。科学の進歩を否定する

人はいないであろう。しかし、そのことのみに執着しすぎることは、危険なことである。つまり、科学は哲学から発展してきたとは言え、往々にして人間存在を無視したところでなされる傾向にあり、その結果危険な状態に陥るということである。例えば、人間にとって便利であるということから開発されたフロンガスを使用しての様々な物品は、地球を取り巻くオゾン層を破壊することによって最終的に人間によって否定されることになった。このような例は、科学の力を科学の力を持って制したと言えるが、現代病と言われる『刺激飢餓』^{注8)}を治すにはいかにしたらよいのであろうか。この『刺激飢餓』の原因が科学の力によるものであるということは、誰もが認めることであろう。しかし、これを科学の力によって制することは可能であろうか。大変難しい問題である。

スポーツの世界に目を転じてみると、最近『ニュー・スポーツ』と言われるスポーツ活動が人気を呼んでいる。それは、現代社会のニーズに応えたものであると言えるだろう。つまり、スポーツはいつの時代においても、余暇 (Leisure) 活動³²⁾であり、また、それ故に社会活動でもあるということである。したがって、どのようなスポーツ活動であれ、スポーツ活動が盛んであるということは、その社会が安定していることを意味していると言える。問題は、それらのスポーツが真のスポーツを意味しているか否かということである。

体操競技はスポーツ活動の一つである。そして、それは長い歴史の中で他のスポーツ活動との関連において、体操競技というスポーツの特殊性を確立して今日に至っている。この体操競技は、既に述べたようにドイツ体操 (Turnen) に由来している。それは、一口に言って陶冶を意味している。体操競技の特徴を眺めると、そこで実施される運動は、難しく、危険である。ニュー・スポーツが盛んになった反面、体操競技人口が減少している傾向は事実である。社会の安定は、苦しみや危険から逃れることを意味することであろうか。少なくとも、現代社会を眺める限り、それを否定することは難しい。

今日的科学の進歩は、現代社会の特徴の一つである情報社会に大きな影響を与えたと言える。この情報化された、つまりマス・メディアの社会はその国際化に影響を与え、現状のような混沌とした社会をつくったと言っても過言ではなからう。このような社会に生きる人間は当然ながら、そのことに順応せざるを得なかったのである。その意味から、人間が自らフロンガスの製造禁止を決断したことは、極めて貴いことであると言えるだろう。

表 1

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリオール OS	シュトラスブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
腕支持 前振り 前振り技	前振り上がり支持	1 4	1 1		2 3	1 3		1	(1)3
	前振り上がりひねり支持	1 4							
	ほん転倒立	1							

表 2

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリオール OS	シュトラスブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
腕支持 後ろ振り 後ろ振り技	後ろ振り上がり開脚入れ(脚前挙支持)(支持後ろ振り)	1	1	1	1 2	2 3	1		1(1)
	後ろ振り上がりひねり支持	1 4							
	後ろ振り上がり前方宙返り支持(ホンマ)								1(1) 3
	前方腕支持回転	4							
	後ろ振り上がりとびひねり倒立								

21 世紀を目の前にした現代社会に生きる人間は前述のように混沌とした生き方をしているが、一方では未来の社会の在り方に対して模索しているとも言える。

6. 考 察

本研究のねらいは、体操競技の種目特性を明らかにすることであり、その一種目である平行棒に焦点を合わせ、本来平行棒で実施されるべき運動がどのようなものであるかを検討しようとするものである。したがって、ここでは筆者が問題としている『車輪運動』、『横向きでの運動』、『姿勢の問題』そして『静止技』の 4 点に絞って考察を進めたい。

6-1. 車輪運動の是非について

前述したように平行棒はヤーンが創った種目であり、その由来が工事現場の足場の棒であったことは史実で示

されている通りである³³⁾。この平行棒は、時代の変遷と共に、その高さやバーの形、あるいは器具の素材が変わり、現在のように至っていることも確認できた。

ヤーンは、平行棒をあん馬の補助的用具として開発し、あん馬の近くに設置するよう指示したと言われる³⁴⁾ように、その主な課題が筋力トレーニングにあったと理解できる。

金子³⁵⁾は 20 世紀後半の平行棒の演技は、戦前のように力技や静止技中心で競い合った時代は去り、振動系を用いたダイナミックな演技で競われるようになったと述べている。このことは、振動系の技術が器具の改良に伴って発展したことを意味している。また、一方でルールの改訂がそれらを促進したとも言える。今日発表されている演技内容を観てみると、時代の相違を強く感じるが、おそらくヤーン自身も当時このような運動形態を想

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベーン WM
3	2 3				3	(1)	3(3)		1 3 1 3
1									

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベーン WM
1	2 3 2 3				1	1(1)	2	1	2 3
(1)									
	2								
		1	1	1					

像さえしていなかったであろう。

1978年に初めて発表された平行棒における後方車輪倒立は、当時の体操競技界で新しい概念として受けとめられ、現在に至っている。そして、この概念が認められたことにより、その後多くの発展技が創造されてきた。それらの発展技の多くは、採点規則上高難度技として位置付けされてきた。ここでの車輪が屈膝姿勢に問題があるということについては既に述べたが、同時に『握り手』についても一考を要するだろう。

本来、車輪運動は鉄棒において発展してきた技術要素である。それが、1960年代の半ば頃からつり輪において登場し、続いて平行棒で見られるようになった。つり輪における車輪は、つり輪の持つ器具特性から、鉄棒におけるそれとは運動形態に大きな違いが見られる。一方、平行棒における車輪は、運動の形態そのものは鉄棒

でのそれと大きな違いは見られない。しかし、器具の特性から懸垂時において鉄棒と違った大きな握りの制約を受ける。その最も大きな要因は、2本のバーにあると言ってよい。平行棒における車輪は縦向きで実施されているがために、握りの制約を受けることに繋がっている。平行棒においては、次項で考察の対象になっている横向き運動もあり、横向きでの車輪運動も考えられるが、未だにその実現は見られていない。それを阻んでいるのは2本のバーである。また、平行棒の高さは本来的に完全な懸垂を要求しているのではない、という点から見た屈膝姿勢での車輪運動をいかに考えたらよいのだろうか。

表5に見られるように、モスクワでの世界選手権大会以降、全ての上位選手によって後方車輪倒立（懸垂前振り技群を含む）が実施されている。換言すれば、この車

表 3

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラス ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
技 群	前振りひねり 腕支持	4	1						
	前振りひねり 支持	1 4			2 3	2 3	1 1	1	3
	前振りひねり 倒立			1	1	1	2 2		1(1)
	前振りひねり 開脚倒立								
	前振り片腕支持 1 回ひねり倒立 (ディアミドフ)	4			1	2		1	
	前振り片腕支持 1¼ひねり単棒 横向き倒立								
	後方棒上宙返り 支持		1 1		2	3			
	後方棒上宙返り 倒立			1	3	1 2 3	1 2	1	(1)
	後方棒上宙返り ひねり腕支持								
	後方棒上宙返り 開脚入れ支持			1					
	とび上向き転向 (カトウ)					1		1	
	前振り片腕支持 3/4 ひねり単棒 横向き倒立直ちに 片腕支持 3/4 ひねり支持 (マ クーツ)								
	後方棒上 2 回 宙返り 腕支持 (モリスエ)								
	後方棒上屈身 2 回宙返り腕支持								

輪系の運動はこれまで上位を狙うための必須技であったのである。選手、コーチの側から見れば、上位を狙うための演技内容の方向性としては当然のことであり、更に独創的な技術開発を考えていくことは間違った行為・行

動ではない。問題は、ルールそのものに潜んでいると言える。つまり器具の特性上、車輪運動は鉄棒に全面的に委ねるべきであり、平行棒においては、その種目の器具特性に適合した技術開発を奨励するようなルール改訂が

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタペスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベーン WM
1(1)	1 3	1 2 3	1 2 3	1(1) (1)	1 2 3 1 3	1 3 1	1 2 3 2(3,3)	1 3	1 2 3
	1								
(1)	3								2
				3	2 3		(3)	2	
1(1) (1)	1 1	1 2 1 2	1 2 1	1 1		(1)3	1 1	1 3 1	1
						(1)			
	3							2	
					3		(3)		1 3 3
									1

必要であるということである。

6-2. 横向き運動の是非について

平行棒での横向き運動の是非について考察を進める前に、平行棒における運動の発展経緯を探って見る必要が

ある。

ヤーンが指導した当初の運動内容を見ると、そこにはすでに振動技（支持前振り、支持後ろ振り）は存在していた^{注9)}。その後の振動技の発展は、支持において顕著で

表 4

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラ ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
支 持 後 ろ 振 り 技	倒立ひねり	1		1	2	1			1(1) 3
	逆倒立ひねり		1		3 3		2		
	倒立 1/4 ひねり		1						
	開脚倒立ひねり 連続								
	支持後ろ振り 上がり倒立								
	後ろ振りとび ひねり支持					3			
	後ろ振りとび ひねり倒立							1	
	後ろ振りひねり 支持								
	前方宙返り腕支持								(1)
	前方 1¼宙返り開 脚抜き支持							1	
	前方宙返り支持				2				
	後ろ振り倒立経過 片腕支持 1 回 ひ ねり腕支持								1
	後ろ振り倒立経過 片腕支持 1 回 ひ ねり支持 (ヒーリー)								
	前方かかえ込み 2 回宙返り腕支持								
	前方かかえ込み 1¼宙返り支持								

あったが、1978年の車輪運動出現までは主に支持の他に腕支持における振動技、そして更に棒下での屈身懸垂きりかえし技などが主流であった。横向きでの振動技は表7でも見られるように発生当初から主に演技の開始技として実施されてきた。そして、そのことが反映してか、1975年版採点規則集における開始技の技群には、横向きでの開始技が大半を占めている³⁶⁾。しかし、第20

回近代オリンピック・ミュンヘン大会(1972)から、第22回世界選手権大会(1983)までの約10年間以上は、横向きでの運動が上位選手において実施されていなかった。一方、体操辞典³⁷⁾によると規定演技で、第9回近代オリンピック・アムステルダム大会(1928)から第25回近代オリンピック・バルセロナ大会(1992)までの間で、この横向きでの運動が唯一取り扱われたのは第15

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベン WM
(1)	2	3	3	(1)	1 3	(1)3	1 2 (3)	3	1 2 3
3		2			2			2	
	3			3	2 3		(3)	2	1 2
	1								
3	2								
			2		2		1 3	1 2	1
		2	2	(1)	1	1	2		
									2 2
	2 3								
		2 3 2 3	2(3) 2(3)	(1)	1 2 1 2	1(1)3 1(1)3	1 2 3 1 2	1 2 3 1 2 3	1 2 3 1 2 3
				(1)	1	1	2	1 2	3
						(1)			

回近代オリンピック・ヘルシンキ大会のみである。そして、それは、開始技として取り扱われたに過ぎなかった。このことは、平行棒における横向き運動が器具の特性上、奨励されていなかったと考えられる。

ちなみに、第26回近代オリンピック・アトランタ大会の規定演技の内容に横向きでの運動が取り扱われているが、それを踏襲するまでの過程でかなりの議論があっ

たと聞いている。

人間の腕が2本あり、平行棒のバーも2本あること、そして平行に置かれた2本のバーが縦に伸びているということは、ヤーンがあん馬からヒントを得たということから考えても平行棒の持つ最も大きな種目特性であると言える。

平行棒において、横向きでの運動が実施されている背

表 5

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラ ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
懸 垂 前 振 り 技	後方車輪倒立						1		1 3 3
	後方車輪ひねり倒立								
	後方車輪片腕支持 1 回ひねり倒立								
	懸垂前振り後方宙 返りひねり支持								
	懸垂前振りから後 方 1½宙返りひね り腕支持								
	振り下ろし懸垂前 振り上がり支持 (モイ)								
	伸膝で振り下ろし 懸垂前振り上がり 開脚抜き倒立 (ティップルト)								

景を考えると、そこには次のような特徴が見られる。つまり、選手の側から見た横向きでの運動実施は加点制度との関わりが顕著であるということである。表 7 に見られるようにシュツットガルト、およびインディアナポリスにおける世界選手権大会ではそのことがよく反映されている。また、採点規則集の難度表を見ると、横向きでの運動は縦向きでのそれと比べ評価の基準が高く格付けされている。それらの内容の殆どは単棒を利用したものであり、使われない他の棒は運動を妨害しているに過ぎない。これは、平行棒のもつ種目特性に逸脱するものであると考えられる。

平行棒における終末技について考えてみると、そこで見られるのは、殆どが縦向きでの後方かかえ込み、あるいは屈身 2 回宙返り下りである。それは、横向きでの技術開発の困難さを意味していると言えよう。否、それ以上に平行棒という器具の特性（2 本の棒）がそれを阻止しているものと言える。

6-3. 姿勢の問題

体操競技での姿勢は常に美しさと深い関係がある。現行の採点規則集第 16 条でも『安定性、優雅さ、そして雄大性は試合における美的演技実施のための大前提であり

…』とある。体操競技における採点評価の主要素はこの『美しさ』、『安定性』に『難しさ』が加わる。体操競技における美しさの概念規定は、至難なことであると言えるが、例えば滝沢³⁸⁾は次のよう述べている。つまり『体操競技などは選手の演技を評価・採点するということから、他のスポーツ以上に「美的なもの」と「芸術的なもの」を分けて考える必要に迫られる』、ということである。体操競技では、この『美的なもの』を、評価を容易に（より客観的に）する意味で、主にその対象を姿勢に求めている。一方『芸術的なもの』は主に技術の有り様に求めている。しかし、実際の評価・採点においてはこれらを分離しては考えられない。即ち、体操競技において『美しさ』『安定性』『難しさ』はそもそも技術の成果として表れるもので、これらの諸要素は一体を成しているということである。更に換言すれば、これらの諸要素が集約されて『美』に通ずるものである。姿勢の問題は、このようなことと関連して考えられなければならないだろう。

体操競技では伝統的に、その姿勢を『かかえ込み』『屈身』『伸身』『閉脚』『開脚』『屈腕』『伸腕』の 7 種類に分けている（女子についてはその限りではない^{注10)}）。しか

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベン WM
1(1)3 3	2	1 3	1 3	1(1)3	1 2 3	1 3	2(3)	3	1
1		3	3	3			1	1	
				(1)	1	1 3 3	1 2	1 3 3	
							3		
							3		
		3	2 3	(1)	1	1	1 2	1	2
		3	3						

し、これらの姿勢のあり方を規定することは極めて困難であり、そのことから体操競技界ではしばしば問題が生じる。

1980年代半ば頃から、特に開脚姿勢について問題視された。具体的な例としては、平行棒における前振りひねり開脚倒立、開脚倒立ひねり、つり輪における開脚脚前挙、更にはあん馬における開脚下向き全転向などである。この時期は、特に『独創性』^{注11)}による加点があたかも勝敗を決する要素であったかのように見られていた。つまり選手、コーチは技術面での独創性のみならず、姿勢面での独創性を考えようとしていたのである。結果的には、これらの姿勢は邪道であると判断され、ルール上制限されるようになった。その邪道であるという根拠は主に、姿勢の規定に置かれたと考えてよい。開脚は、姿勢欠点の一つである『脚が開く』と混同され易い。その理由は開脚の姿勢規定が曖昧であるからに外ならない。

柔軟性を表現することは体操競技の根本的な課題の一部でもある。そして、開脚はその柔軟性を表現する姿勢の一つである。それは、主に股関節の柔軟性を意味している。1980年代半ばに見られた上述の開脚での諸演技は、この観点からほど遠いもので、姿勢欠点である『脚

が開く』と、表現としての『開脚』が混同されたものであると言える。

本来、表現は自由であるべきかも知れない。一般社会に見られるファッションの移り変わりは表現の自由を意味するものであろう。しかし、体操競技におけるそれは規制されている。それは、前述したように体操競技の伝統であり、その伝統を守る所以は体操競技を通しての陶冶であると言ってよいだろう。そして、それはヤーンの思想に通ずることでもある。つまり、一般社会において人間が社会秩序を守り、人間の豊かな生活を保証するために諸ルールが存在するのと同じように、スポーツの世界においても諸ルールが存在するということであり、それらは基本的に人間のために存在しているということである。

流行としてのファッションは、人々の理性によって、ある時期において淘汰される。体操競技の場においても同じような現象が起こり得る。ここで問題にしている開脚での演技もある意味では、流行としてのファッションであったと見ることもできる。それらは、結果的に人為的に淘汰されたことになるが、それは体操競技の理念に導かれた結果であるとも言える。

表 6

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリオール OS	シュトラスブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
屈 身 懸 垂 き り か え し 技	棒下振り出し 腕支持	1 1	1	1	1 2	2 3	1		1(1)3
	棒下振り出し支持	4		1	2	1	2		
	棒下宙返り腕支持		1						
	棒下宙返り支持	1							(1)
	棒下宙返り倒立				1	2 3	1	1	1
	棒下宙返りひねり 倒立								
	棒下宙返りひねり 支持 (カジヤマ)						2		
	逆上がり支持				1				
	逆上がり倒立	1				3	2		
	逆上がりひねり 懸垂				3				
	け上がり				3			1	
	け上がり開脚 抜き支持				1	2	1 2		1(1)3
	け上がり開脚 抜き倒立								
	前方棒下宙返り 支持				3				

6-4. 静止技について

既に触れたようにヤーンの時代における平行棒運動は『腕力強化の運動』と『勢いをつけて行う運動』という二つの運動領域に分けられていた。『勢いをつけて行う運動』については一般に現在行われている振動技系の運動を連想しがちであるが、それとは違い『馬術的な運動』を意味していた。例えば、『腕支持の姿勢から脚を振動させてバーの外にとび下りる』³⁹⁾ と言うような内容であった。即ち、この頃の平行棒運動は、力を用いた運動がその主流を占めており、そのことは1811年、ヤーンが初めて指導した時の平行棒運動の内容からも理解できよう。

採点規則集からこの静止技について考えると、例えば1955年版のスポーツ・ルール集の体操競技規則（男子）の平行棒には次のような事が記述されている：

『力の動作が少なくとも一回』、『目立った静止は三回

より多くあってはいけない』⁴⁰⁾。ここでは、力技はルール上義務づけられていた。つまり、姿勢保持のような静止技は三回を越えてはならないとしながらも、演技構成上力技を要求していたことになる。また、1975年版採点規則集には、『静止技をもって構成し、さらにふさわしい力技をいれることができる』⁴¹⁾ とある。ここでは力技の規制は無くなったことになり、試行錯誤的なルールであったことが伺える。

現行の採点規則集、1993年版では『演技には最大三回の静止あるいは静止技を含むことが許されている』とある。これは、鉄棒の演技のように、力技も、そして演技が静止することなく行ってもよいと言うことに繋がる。表1から10を見ると、演技構成上この静止を実施しない現象が起こり始めたのは、1980年代前半からであったということが理解できる。

一方体操辞典⁴²⁾によると、規定演技では第9回近代オ

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ボリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ベーン WM
1(1)	2	1	1	1					
3					2			2	
3	1								
		1	1	1					
1									
(1)		1 3	1 3	1 3		(1)			
		2	2	(1)		3		3	
3	2				1		2		
				(1)	3	1 3	3 (3)	3	3

オリンピック・アムステルダム大会(1928)から第25回近代オリンピック・バルセロナ大会(1992)まで、全ての大会において静止技(力技も含む)が行われていた。これは、Turnenの理念に沿ったものであるか、或いは、伝統的運動形態の形式的伝承なのか定かではないが、この半世紀以上も続いた、平行棒の特徴を表す要素の一つである静止技(力技も含む)が規定演技としては最後の大会になるであろう第26回近代オリンピック・アトランタ大会(1996)の平行棒の演技構成から消えたことをどのように考えるべきなのであろうか。

体操競技男子6種目から『静止技』を要求している種目を見ると、『ゆか』『つり輪』の2種目である。その『ゆか』運動でも、現行の採点規則集から、力技による静止技を実施しなくても減点の対象とはならなくなった。これは『ゆか』の種目特性から考えられたものであろう。この種目の特性はアクロバットの跳躍技を主要素とした

運動内容を持って構成されているところに見出される。そのことから、ゆかにおける静止技はバランス技だけでよいということになった。一方『つり輪』は器械器具の特性上、上部が固定されていないことから静止技の実施は力技も含めて不安定でより難しい。また、そのことから価値が見出され、それ故に種目の特性に合致するものであると言える。

静止技は本来、平衡性(バランス能力)と筋力の両面から要求された体操競技の必須要素であると同時に姿勢(体勢)を明確に表現する要素でもある。つり輪以外の種目で最もよくそれらを表現できる可能性を持った種目は平行棒であると言える。

以上のことから、平行棒における静止技(力技も含む)は構成上の特別要求の一つとして復活すべきであろう。

表 7

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラス ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
単 棒 横 向 き の 技	単棒横向き, 前方 開脚浮腰上がり開 脚前拳支持, 開脚 伸腕屈身力倒立		1						
	正面横向き立ち, 遠い方の棒を握 り, 逆上がり倒 立, 手前の棒に移 り懸垂		1						
	正面横向き立ち, 遠い方の棒を握 り, 逆上がり 1/4 ひねり倒立								
	単棒横向き, 前方 浮腰上がり脚上拳 支持, 伸腕屈身力 倒立								
	単棒横向き, 前方 浮腰上がり脚前拳 支持 伸腕屈伸力倒立								

表 8

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラス ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
脚 回 旋 技	支持後ろ振り 開脚入れ(支持) (脚前拳支持)			1	2 3	1 1	2	1	1 3
	棒端両足旋回 2 回			1		1			
	棒端両足旋回 1 回								
	開脚旋回 2 回 から倒立								
	屈腕前振り開脚 抜き支持								3
	屈腕前振りとび 上向き転向支持								
	下向き転向支持					1			

表 9

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラス ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
力 技・ 静 止 技	屈腕伸身閉脚力倒立	1							
	開脚伸腕屈身力倒立	4	1	1	1 2 3	1 2 3	1 2	1	1
	片手伸腕開脚倒立				3				
	伸腕屈身力倒立								(1)
	脚上挙支持								
	前振り上がりひねり 支持～脚前挙支持	4							
	水平支持								(1)
	単棒開脚前挙支持 1 回ひねり								
	開脚水平支持								

表 10

開催年		1964	1968	1972	1974	1976	1978	1980	1981
技群	大会名	東京 OS	メキシコ OS	ミュンヘン OS	バルナ WM	モントリ オール OS	シュトラス ブルク WM	モスクワ OS	モスクワ WM
	技名								
終 末 技	前方屈身宙返り ひねり下り	1 4	1						
	後方かかえ込み 2 回宙返り下り			1	2	1 2	1 2	1	1(1)
	後方屈身 2 回 宙返り下り					3			
	前振りひねりとび出 し前方屈身宙返りひ ねり下り(ケンモツ)				1				
	後方伸身宙返り 1 回ひねり下り				3				
	棒端外向き懸垂から 後方かかえ込み 2 回宙返り下り								
	棒端前方かかえ込み 2 回宙返り下り								
	前方かかえ込み 2 回宙返り下り								3

1983	1984	1987	1988	1989	1991	1992	1992	1993	1994
ブタベスト WM	ロサン ゼルス OS	ロッテル ダム WM	ソウル OS	シュツット ガルト WM	インディアナ ポリス WM	パリ WM	バルセロナ OS	バーミン ガム WM	ブリス ペーン WM
1	1 3	1	1	1			3		
					(1)	1	1		
		1	1	1					
	1								
	3	2							

[illegible]

7. まとめと今後の課題

今日にみられる科学の進歩・発展は目を見張るものがある。しかし一方で、近代科学の進歩・発展は人類のみならず、地球に生きるあらゆる生物に深刻な影響を及ぼしている。例えば、環境問題がその一つで、具体的には5項でも触れたように、フロンガスによるオゾン層の破壊が挙げられる。フロンガスは人間にとって便利であるという理由からつくられたものであるが、人類に害を及ぼすということから製造禁止を決断したことは極めて貴いことであると言える。

これまでの歴史からみて人間が、一度進めたある事柄の方向を軌道修正することはできても、全廃することは極めて難しいことである。一度持った車を手放すことの難しさを我々はよく知っている。

本研究では、平行棒の種目特性について考察を進めてきた。それは、ヤーンの体操理念を中心にしてきたわけであるが、終局的には体操競技は陶冶を意味するものであるということであった。片寄りはヤーンの思想から逸脱するものである。このことは、現代人についても言うことである。船井⁴³⁾が言うように21世紀はこれまでに以上に『共存』『共栄』の理念を重視すべきであろう。そして、この『共存』『共栄』の理念を実現するためには、常に他を思いやり、ものごとを総合的にみていかなければならないということである。その意味から考えて、5項で触れたフロンガスの製造は個別的な判断によるものであったと言える。

体操競技のルールを考える場合、常に6種目（男子）全体から考えなければならないだろう。それは、ヤーンの求めた理想に近づくという意味でもある。この点から考えて種目毎の世界選手権大会は、ヤーンの理念から遠ざかるものであると言えるだろう。それは、既に述べたように種目のスペシャリスト化に通ずるということである。種目のスペシャリスト化は個別化を意味し、共存、共栄の理念に逆らうものである。

現代社会を眺めると、社会全体が実に混沌としている。一方、社会活動の一要素であるスポーツの世界においても、同じような現象が見られる。スポーツ活動が個別化し『競技スポーツ』や『生涯スポーツ』また、『見るスポーツ』や近年では『ファッション感覚のスポーツ』等などといった具合に人々は様々な意図を持って活動している。このような現状であるだけに、物事の本質を考察することがこれまで以上に要求されてきたと言える。

体操競技大会において、規定演技の廃止が決定した^{注12)}。もし、その主な理由が『規定演技は一般観衆に魅力がないから』ということであるとすれば、それは、体

操競技の本質的なことが充分考慮されずに決定されたということになる。

平行棒における考察結果をまとめると上述のような物事、つまり体操競技の本質から掛け離れた所でルールづくりがなされてきた嫌いがある。そのことが結果的に平行棒の持つ器械器具特性から離れる方向で演技発表がなされていることに繋がっている。

今後、平行棒に関するルールづくりにおいては、平行棒のこののみを念頭において考えるのではなく、体操競技全体、更にはその主体となる人間の生き方を総合的に捉えて考えていくべきであろう。

—注—

- 1) ある一時期高難度技に対し、減点を緩和する処置を取ったルールであり、1968年版採点規則集によってそのルールが執行された。
- 2) ヤーンの奨励した体操は全身的な運動の意義があり、今でもドイツに残る『ヤーン9種目競技 (Jahn Neunkampf=体操競技、陸上競技、水泳競技のうち、それぞれ3種目ずつからなる)』。
- 3) 体操競技の試合における種目のローテーションを意味し、男子の場合ゆか、あん馬、つり輪、跳馬、平行棒、鉄棒の順に演技を行う（開始種目は抽選で決定するため、どの種目からスタートするかは定まっていない）。
- 4) 1995年7月11日ベルリンにおける第10回世界ジュナストラダの機会に模様されたハーゼンハイデ体操場改修工事完成記念式典で配布された資料による。
- 5) FIGにおける男子体操競技の採点規則集が冊子として、初めて作られたのは1949年に遡るが、その後は4年毎に改訂され今日に至っている。
- 6) ドイツ語圏では二人称を表す言葉としてSie（あなた）とdu（君）がある。目上の人や、初対面の人物にはSieで話す、一方体操仲間や友人仲間などでは年の上下に関係なく、duで話されている。
- 7) 注4と同じ資料による。
- 8) 現代人は近代科学の恩恵を受けて育っているため、科学の力なしでは1人歩きできないような状況に陥っている傾向にある。一方、科学の力が人々の欲望を容易に充たしてくれるため、次から次へとその欲望が膨らんでいっている。つまり、知らず知らずのうちに次々と刺激を求めているということであり、そのような現象を刺激飢餓と呼んでいる。
- 9) 注4と同じ資料による。
- 10) 女子ゆか、平均台においては、より表現を豊かにするため、これ以外の姿勢が認められている。
- 11) 体操競技でいまだかつて披露されたことのない技法や技そのものに対し与えられた加点の一領域である。

- 12) 1997 年以降の FIG が関係する大会において規定演技を行わないということが、1994 年の FIG 総会（ジュネーブ）において決議された。

文 献

- 1) 滝沢康二：『スポーツにおける審判員の倫理』，日本体育大学紀要，第 20 卷（第 2 号）PP. 83-90.
- 2) 日本体操協会審判委員会男子審判部編集：『採点規則』，1993，P. 5.
- 3) 同上書 P. 19.
- 4) 滝沢康二：『体操競技界における現状の諸問題についての哲学的検討—進歩・発展の意味を中心に—』，体育原理研究，第 25 号，1994，P. 18.
- 5) 日本体育協会編集：『スポーツルーズ』，不昧堂書店，1952，P. 2.
- 6) (財)日本体操協会審判委員会男子審判部編集：『採点規則』，1993，P. 19.
- 7) 林 達夫他監修：『哲学辞典』，平凡社，1971，P. 1018.
- 8) 新村 出編：『広辞苑』，岩波書店，1969.
- 9) Redolf Spieth: 『Geschichte der Turngeräte』，Redolf Spieth, 1989, P. 57.
- 10) 稲垣正浩編：『先生なぜですか・とび箱ってだれが考えたの?』，大衆館，1991，P. 164.
- 11) 滝沢康二：『体操競技界における現状の諸問題についての哲学的検討—進歩・発展の意味を中心に—』，体育原理研究，第 25 号，1994，P. 18.
- 12) 船井幸雄：『これから 10 年本物の発見』，サンマーク出版，1993，P. 145.
- 13) FIG: 『OBJECTIF AN 2000』，suisse, 1991, P. 56.
- 14) 岸野雄三他：『体育・スポーツ人物思想史』，不昧堂出版，1979，P. 199.
- 15) 成田十次郎：『私たちと近代体育』，福村出版，1970，P. 81.
- 16) 岸野雄三他：『体育・スポーツ人物思想史』，不昧堂出版，1979，P. 220.
- 17) 成田十次郎：『近代ドイツスポーツ史 I 学校・社会体育の成立過程』，不昧堂出版，1976，P. 334.
- 18) 日本オリンピック委員会監修：『オリンピック辞典』，プレス ギムナスチカ，1981，P. 139.
- 19) 同上書 P. 140.
- 20) 成田十次郎：『近代ドイツスポーツ史 I 学校・社会体育の成立過程』，不昧堂出版，1976，P. 362.
- 21) 稲垣正浩：『先生何故ですか・とび箱ってだれが考えたの?』，大修館，1991，P. 160.
- 22) 同上書 P. 161.
- 23) 同上書 PP. 172-173.
- 24) 同上書 PP. 166-167.
- 25) 金子明友：『体操競技のコーチング』，大修館，1973，P. 100.
- 26) (財)日本体操協会審判委員会男子審判部編集：『採点規則』，1993，P. 121.
- 27) (財)日本体操協会男子競技本部編集：『採点競技』，1975，P. 13.
- 28) 金子明友：『体操競技のコーチング』，大修館，1973，P. 106.
- 29) 同上書 P. 108.
- 30) 同上書 P. 106.
- 31) 阿部 忍：『体育の哲学的探求』，道和書院，1985，P. 95.
- 32) 福武 直他編集：『社会学辞典』，有斐閣，1958.
- 33) Redolf Spieth: 『Geschichte der Turngeräte』，Redolf Spieth, 1989, P. 57.
- 34) 金子明友：『体操競技のコーチング』，大修館，1973，P. 99.
- 35) 金子明友：『体操競技教本 I 平行棒編』，平文社，1969，P. 270.
- 36) (財)日本体操協会男子競技本部：『採点規則』，1975，PP. 122-124.
- 37) 佐藤友久他編集：『体操辞典』，道和書院，1978，PP. 277-300.
- 38) 滝沢康二：『体操競技界における現状の諸問題についての哲学的検討—進歩・発展の意味を中心に—』，体育原理研究，第 25 号，1994，P. 14.
- 39) 稲垣正浩編：『先生何故ですか・とび箱ってだれが考えたの?』，大修館，1991，P. 160.
- 40) 日本体育協会編集：『スポーツ・ルール集』，不昧堂，1955，P. 75.
- 41) (財)日本体操協会男子競技本部編集：『採点規則』，1975，P. 13.
- 42) 佐藤友久他編集：『体操辞典』，道和書院，1978，PP. 277-300.
- 43) 船井幸雄：『これから 10 年本物の発見』，サンマーク出版，1993，P. 144.